「防衛省改革会議」（第１２回）（１２月２５日）
会議終了後の記者ブリーフ要旨

１．会議の概要（南座長より説明）

○　本日、午後４時４５分から１８時１５分までの１時間半にわたり、第１２回目の会議を開催いたしました。出席者は、政府側からは河村内閣官房長官、浜田防衛大臣、松本内閣官房副長官、鴻池内閣官房副長官、漆間内閣官房副長官及びその他、三谷内閣情報官、柳澤官房副長官補、増田防衛事務次官が出席され、委員は全委員が出席されました。

○　本日は、前回の７月１５日の会議で内閣総理大臣にご報告いたしました「不祥事の分析と改革の方向性」と題した防衛省改革会議の報告書を受けて、「２１年度の防衛省組織改革に関する措置」などの防衛省改革の取組みについて、増田防衛事務次官から説明がありました。

○　その後意見交換に入り、委員の皆様方により活発な御議論をいただきました。その内容については、柳澤官房副長官補よりご説明をさせて頂きます。

２．議論の概要（柳澤官房副長官補より説明）

○　委員の皆様方のご意見について要点をご報告させて頂きます。

○　ご意見は田母神問題に関してのものがすべてでありました。

・　この問題の基本は、歴史観がどうかというよりも幹部となる人材の教育訓練ということであったのではないか。今回の報告書でも幹部となる人材の育成が重要とは触れているが、文官の幹部については、結構書いていると思うが、自衛隊の高級幹部となる自衛官の人材育成については、もう少し具体的に掘り下げるべきだったかもしれない。

・　教育の具体的なやり方については、戦史教育は相当やっているようだが、戦史だけではなく、より広い意味での政治史、近代の政治史をちゃんと教える必要があるのではないか。特に、日本の戦後処理の課程の中で、周辺国とどういう形で関係を再構築していったかのプロセスについてよく理解させていくことが必要。

・　統幕学校で行われていた歴史観の講義も、講義をされる先生方の顔ぶれを見れば非常に有名な方で、全体として人選にバランスを欠いていることはすぐに分かるので、今後チェックするようにしないといけないのではないか。

・　制服トップとして大臣からの信を失った場合、辞めて当然のはずなのに、田母神氏がどうしてこだわったのか。そこにもしかしたら、制服と政治の間の共通の理解

の基盤がなく断絶があるということかもしれないが、実態はそうではないはずなので、制服と政治の間の断絶がないということを実感してもらうことが大事。そのために、防衛会議といったような、政治と自衛官と文官が混在して色々と議論していく場ができていくということは、こういう問題の再発防止の面からも非常に重要ではないか。

・　こういう事案がある度に、締め付けを強くする方向だけでやっていくと、また、別の形で不満の芽を作る恐れもあるので、何が悪かったかということを、具体的に明らかにしていくことが必要。

・　この問題が起きた時、防衛大臣の訓辞が間髪入れずに行われ、内容的にも非常に良かったと思うが、それが全国の部隊の幹部にしっかりと伝わる必要がある。それは形式的に電報で伝えれば終わりということではなく、中央から誰か人が行って直接話をするような形で努力してみることも考えてみては。

・　現職の最高幹部として個人の見解をこういう形で言うのは当然マズイというのは常識。そういう認識がどうしてないのか。それはやはり、高級幹部となるべき自衛官の教育の問題につながっていくのだと思う。アジア諸国の目から見て、軍隊と同一だと自衛隊を見ていたはずなので、そのトップである人がこんな発言をしたらどう受け止められるのかということも当然考えなければいけないこと。そういう観点からも、戦い方の歴史である戦史よりも幅広い教育をやったらいいのではないか。また、今回のケースを受けて、幹部の意識がどうであるのかということを、出来ればフォローアップして欲しい。

・　田母神前空幕長について、懲戒処分を行うべきではないかという意見もあるが、田母神前空幕長に職務上の失敗があったわけではないため、懲戒処分とするのは重いと受け止めるのが妥当。

・　一部で応援団が田母神前空幕長を評価しているところがあるが、自衛隊全体が非常に冷静な立場をとっているのは大変良い。

・　「やはり制服組には任せられない」という抑圧的な風潮が出てくると、制服の側が自発的にシビリアンコントロールを受け入れることにマイナスの影響がある。

・　制服の自衛官の教官が自衛隊の教育機関に行った場合、昨日まで部隊にいて、十分な準備をしないまま、１年、２年という短い教官の職に就いてまた部隊に帰っていくという人事のローテーションがある。過去の教科書に不適切な部分があっても、それを変えるためには相当なエネルギーがかかるので、それは使わずに自分なりにレジュメを作って講義をするようなことが現実として見られている。教官になる人材は非常に少ないので、幹部教育機関全体の在り方をしっかりと見直していく必要

がある。

・　今回の問題の本質は、防衛省改革の文脈の中で言えば、プロフェッショナリズムの問題ではないか。つまり、トップが自分の行為・発言の影響を十分自覚していないという意味で、トップにおいてプロフェッショナリズムが欠落しているという問題と捉えるべきではないか。そうであるとすれば、高級幹部の教育機関について、教育内容やその在り方を含めてしっかりと見直すべき。

○　全体の議論を踏まえ、防衛大臣から、「基本的にご指摘はごもっとも。田母神問題については、防衛省から今回出した報告書の中で、今後の運用の問題であるとして必ずしも具体的には触れてないところがあるが、自分としても今日いただいたご意見は必要な問題点であると考えているので、それらを一つ一つ潰しながらやっていきたい。田母神事案は、防衛省改革会議の報告書が出た後で起きたが、そういったものの再発を防ぐためにも、防衛省改革会議の報告書に沿った改革を進める必要がある」との結びで会議を終えました。

（以上）